

芥川だより

発行日 * 2024年2月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸
発行人 下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****



言葉探しの旅

何かを考えたり、活字にしようとしたりすれば必ず表現する言葉を探さないといけない。言葉なしでは、物事を考えることはできない。たとえイメージを表現する場合も言葉を思考の中で使う。短い俳句や短歌をされている人は多くの語彙を暗記されているに違いない。繊細な言葉選びが読者に作者のイメージを上手く伝えられるか否かの決め手になるからだ。

多くの言葉は常に消えていくもの、新しく生まれてくるものなどさまざまだが、日本語の語彙はおよそ5万と言われる。英語での語彙数も同じくらいとか。人の言語能力は意外と似ているようだ。しかし、私などが使う語彙数は500もないかもしれない。調べたわけではないが、非常に貧弱なものにちがいない。

語彙数が100分の1程度なら、考える世界も同程度しかないのではないか。つまり狭い小さな世界で生きていくといえる。自分としては、毎日の生活で語彙数を意識したことはなかったし、生活に影響をうけたと思うこともなかった。ましてやネットが普及した今日、辞書は使わずネットで検索すればすぐ答えが出てくるからなおさら辞書が遠のいてしまった。

しかし、ネットで検索する言葉は、これまで使ってきた辞書や本などから覚えた言葉と少し違うように考える。物事が簡単に解決されると、探し出す苦労や楽しみがなくなり言葉が醸し出す風情がなくなるように私は思う。人工知能がますます発達し我々の生活の中で思考する習慣すら失われていく可能性がある。

一部の先端技術者も含めて、どんどん考える時間や議論をする相手などが少なくなっていくだろう。皮肉にも技術が発展するほど、人はロボット化し機械に追いつまられ疲れ果て本来人間が営々と培ってきた大事なものの多くを失っていくように思う。

死をめぐるあれやこれ(110) 石川 吾郎

防災・減災の国家プロジェクトの必要

能登半島地震から一月以上が経った。被災された方々のニュースを見るにつけ心が痛む。しかしこれが明日の自分たちの姿かもしれないと考えると他人事ではない。◆日本で起こる地震は、大きく分けると2種類あり、一つは内陸や陸に近い海底にある断層に起因する地震、もう一つはプレート境界で発生する巨大地震だ。日本は二つの大陸プレートから成っており、これを太平洋プレートとフィリピン海プレートとの二つの海洋プレートが主に東側から潜りこみ続けて、歪みがたまるところで大陸プレートが跳ね返って、巨大地震をほぼ定期的起こす構造になっている。地球科学的にこれは避けることができない。◆最近とくに日本列島は地震活動が活発化の時期に入っている。南海トラフ巨大地震が間近に迫り、プレート境界型巨大地震に先立つ、内陸の断層型地震が頻発する時期に突入しているのだ。熊本地震や今回の能登半島地震はまさにこのタイプの地震だ。これらの地震は規模はそれほどでなくとも、直下型になることが多く、震度七になることも多いのがこわい。なにせ断層は日本のなかに網目のように張り巡らされている。これはどこでいつ起こるか予測が困難だが必ず起こってくる。そしてその締めくくりのように南海トラフ巨大地震が、悪くすれば二度連続して起こってくる。政府は、南海トラフでは犠牲者が三十万人と予想をしているが、それ

だけで済むのかは分からない。近畿から東海・四国、さらには首都圏にも被害が及ぶ。東京一極集中のわが国では、被害が少ない地方でも、交通手段などのインフラが破壊されて生活を維持できなくなる可能性は大きい。大阪や名古屋の低地の街も津波に沈むが、その他の被害を免れる地域も、その後の生活が立ちゆかなくなる可能性が大きい。これは個人の対策ではどうにもならない。◆今回の能登半島地震で、岸田政権は臨時予算を組むことすらしていない。これまで震度七の地震には政府はすべて臨時予算を組んでことにあたってきた。この反応の鈍さは目に余るものがある。さらに今のタイミングで、政府が五年十年の国家プロジェクトとして防災・減災の総合的な対策に乗り出さなければならぬ。だが岸田内閣はそのような大規模プロジェクトを行うおうという気力も気概もない。◆このような政府をもっている我々国民は、自助で巨大地震・津波に対処しなければならぬ、ということに等しい。これはつまり見捨てられた国民ということになる……。

芥川だより二〇五号 目次 ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム III	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 119	坂本一光	2
哲学叢いの時事放談 69	祖蔵哲	3
大峰奥駈道 75	下村嘉明	4
新型コロナウイルス愚考 その 41	明石幸次郎	5
オクラの山たより 89	因丁生	6
隠された歴史 64	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	S K 生	11
ふみの道草 68	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳 (119)

坂本 一光

◆らんまんの春の平和の遠いこと

二年前の二月にウクライナでの戦争が始まり、その行く末が見通せない昨秋、イスラエル・パレスチナ間に戦が勃発した。まるで、

天災のように勃発するいくさ

などとのんきに考えていた元旦。能登半島を大地震が襲い、驚きと不安の収まる間もなく羽田空港で航空機同士が衝突炎上した。例えが違ふと思っけれども、実は小説よりも奇なり。

例えば、二〇〇一年九月十一日、ニューヨーク市の世界貿易センターのツインビルをハイジャックされた旅客機が自爆攻撃しツインビルは焼け崩れ落ちたが、こんな事が起きると誰が想像したか。あるいは、三十数年前に革命のソ連邦やその周辺のワルシャワ条約機構加盟諸国が「一夜」にして崩壊することを誰が予測したか。人間がすることにも、自然がすることにも予測不可能なことが多い。突然のように激変する世界に、

天災も戦も勃発する世界

に、われわれは生きている。そして、

らんまんの春の平和の遠いこと

花は咲く平和の春の遠くても

あれこれと、そんなことを思った正月であった。

しかし勃発するのは天災や戦だけではない。数十年続いていたと言う自民党派閥のパーティー券に関わる不正問題。アレはいつの頃だったか、製造業界で明るみになったJIS規格検査のゴマカシ。「マヨネーズ地盤に杭」と言われながら

辺野古の海に今も政府は届かない杭を打とうとしているが、そう言えば、「糠に釘

状態の届いていない杭打ちのためマンションが傾いたと言う建設業界もあった。損保業界も巻き込んだビッグモーター不正問題があり、最近ではダイハツ・トヨタの不正検査問題等々。長きにわたった安倍一強を頂点とする悪政・政治の不正腐敗無能ぶりが、国民の暮らしに直結するあらゆる領域に際限もなく及んできた。

さらに言えば、この種の問題が起きたときのテレビをはじめとするマスコミの大騒動の陰に、進行する深刻な危機が隠されていたかもしれない。目に見えぬ危機を隠すのに、責任の所在が比較的明らかであれこれの不祥事は格好の話題提供になったのかもしれない。第二次安倍政権の発足から現在の岸田政権に至る十数年の間に集中したさまざまな問題の背後にあった危機の本質は何だったのかと思う。

この危機に関して言えば、とりわけ二〇二三年という年は、政府によって戦後日本の平和主義、民主主義がなし崩しにされ、アメリカの植民地とも言うべき属国的性格が強められ、日本の軍国主義化、平和や国民生活の破壊、学問や文化の軍事への従属が一気に進む危険にさらされた年であった。「GDP比2%の軍事費」というNATOとその盟主米国の要求に添った岸田政権の防衛費倍増宣言などはその象徴であった。

国のかたちが変わる危機が深まった一年。かたちは心の反映であるから、国の

かたちが変わるとは、国のあり方を考える国の心が変わるといふことである。国の心とは、つまるところ、政府の思うところでも言うほかないが、戦争を放棄し戦をせぬ決意を憲法に表明した九条の精神や、被爆国としての国の立ち位置など歯牙にもかけないという考えであろう。世界との関係において、日本の精神や立ち位置を踏まえた外交という文化力より、トマホーク

九条の文化力よりトマホーク

住宅地のご真ん中にある自衛隊大分駐屯地をはじめ全国で長距離ミサイル保管のための弾薬庫の増設・強化が推進されようとしている。

戦争を煽り儲ける資本主義

はあるけれど、それは破滅までの束の間の夢に過ぎない。

経済は平和であつてこそ回る

のである。

(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学爺い」の時事放談(69)

祖蔵 哲

キャンセルカルチャーの哲学

世界ではウクライナ、イスラエルと戦争が絶えない。そして日本でも大災害は必然のごとく起きています。さらに時事問題も同様に同じことの繰り返しである。日本で現在問題になっている事象は自民党派閥の政治資金パーティー裏金問題と芸能人の性加害問題であろう。何やら週刊誌的な興味になるが改めてそれぞれ何が問題なのかを考えてみよう。

(1) 政治の悪

自民党派閥の政治資金パーティー裏金問題は去年ある政党の機関紙が暴露したことからは始まる。疑惑の議員達はパーティー券収入ノルマ超過分のキックバックを受けていたが、法的に問題となるのは、パーティー券収入を得ること自体ではなく、収支報告書にパーティー券収入を記載しない行為である。いわゆる「裏金問題」だ。

政治資金規正法は、収支報告書の作成・公表を求めることにより、政治資金の流れを国民の監視下に置き、不正に利用されることを抑止している。さらに法は、個人や企業・団体から政治家個人に寄付することを禁じているが、例外とし

て、政党から政治家個人に寄付することは認めている。ところが、このような寄付金について、政党側は収支報告書に記載して公表しなければならないとされているが、受け取った議員側には報告義務を明示的には課していない。これはこれまで「法の抜け穴」として問題視されていた。

そして、今回の問題の本質は、記載されていない金が、誰から受け取ったものか、特定の者からどれくらいの金額を受け取ったのか、どのように使われたのかといった一連の金の流れを隠蔽しようとしていたという疑惑である。民主主義の根幹を揺るがす政党と企業との癒着問題が改めて問われている。

この政治資金パーティーはもう四半世紀まえの1999年に行われた政治資金規正法の改正により資金管理団体に対する会社などからの寄附が禁止されたことから始まる。長期にわたってこのような疑惑が行われていたのである。なぜ現在まで公衆に明らかにされていなかったのか。

(2) 芸能界の聖と悪

昨年度のジャニーズ事務所での性的パワハラスメント問題に引き続き、今年になって人気タレントによる一般人への性加害問題が発覚している。いずれも過去に見過ごされていた問題が新たに問題視されているのだ。そのほかにも芸能界

には最近になって過去には曖昧であった問題が今になって告発されるケースが急増している。この現象はどうしてなのか。

「芸能」とは何か。今日、伝統的な芸能として文化財指定されている芸能には雅楽や歌舞伎があるが、もっとさかのぼれば日本書紀に記載されている相撲のように神事としての芸能があった。相撲は、五穀豊穡を願って天皇の前で力比べをしたことが起源をされているが、ほかにも様々な芸能が天皇すなわち神との交信手段として存在していた。つまり、芸能はそもそも「聖と俗」の聖に属するものであり普段の生活とは区分されていた存在である。それが、時代を下り歌舞伎のように庶民の娯楽になったのは近世のことである。その前までの能はまだ神聖な部分が残されていた。西欧文明がもたらされた明治期以後、芸能は完全に庶民の娯楽となったが「芸能界」は聖の部分を引き継ぎ、俗界からは閉ざされた世界を構成していた。この聖の部分を支える人たちはいわゆる「穢れた」人々である。なぜなら神が喜ぶものをもつてくることは相当地危険や困難を伴うからである。動物を殺すことや時には人を殺めることは普通の人たちが出来ることではない。そこには「裏社会」とよばれる特殊な集団ができていた。この集団はいわゆる俗としての「表社会」とははっきり区別されていたのである。しかし、時が流れ芸能が西欧式の「ビジネス化」とすると芸能事務

所が出来て金銭の繋がりや集団が再構成されることになったのである。

ここに起こった問題がいわゆる「素人世界」と「芸能界」との接近である。ビジネス化する前の芸能界は師匠と弟子という師弟関係でも構成された伝統的世帯であったが、それが商業化するといわゆる暴力団などアウトローが関係する世界になった。それ以前の裏社会でもこのようなアウトローの存在はあったが表社会と裏社会の境界ははっきりと区別されていたのである。

現在の芸能界での性加害の問題は、このような芸能の歴史に見られるように「聖と俗」の境界が取り崩された結果の事象である。社会は古来より聖としての「悪」を封じ込めてきたのである。それは存在しないものとして日常から消されていた。しかし、「悪」は本質的に悪であることには変わらない。その悪が現在裁かれていくのだ。

(3) キャンセルカルチャーの正義

今まで話してきた、パーティ券裏金問題や芸能界性加害問題などは過去の事象を今になって糾弾していることに特徴がある。これはどのような事態なのか。それは西欧での社会の変化に関係している。何度も言われることであるが日本には自浄能力がない。外から指摘されてからしか、自国の不備に気づけない。今、世界は「キャンセルカルチャー」の動き

の中にある。

キャンセル・カルチャーは非常に現代的な現象である。インターネットでのSNSで見られる抗議行為の現象のことを指す。抗議行為自体がキャンセルینگと呼ばれる。キャンセルカルチャーというと、日本ではポリティカル・コレクト(政治的に不適切な)言動をした政治家や著名人をSNSなどでバッシングし、社会的地位をキャンセル(抹消)することをいう。

その対象は著名人など権力や影響力を持っている人々である。また、外国では現代の著名人だけでなく、過去の戦争や人種差別を理由に数十年、数百年前の軍人や政治家もキャンセルの対象となっており、彼らの銅像や記念碑に対する抗議運動などが展開されている。それは社会に大きな影響を与える人の言動が倫理的かどうか、過去の言動との整合性が取れているかを確認するために行われる。

有名な女性の性差別を告発した#MeToo 運動やアカデミー賞で白人ばかりが優遇されることを批判する#OscarSoWhite はキャンセルカルチャー

の一種で、インターネットを中心に社会に影響を与える重要な対話を生み出してきた。これらに習って日本でも芸能界でのパワハラ、セクハラや政界でのポリコレが過去に遡って告発されているのである。著名人が何か悪い発言をしたり、倫理観に反する行動をとったら、みんなで徹底的に叩き、地位を奪う。これがキャン

セル・カルチャーである。しかしキャンセル・カルチャーは一種の「暴力」でもある。正義を守らない人に強制的にペナルティーを与えているのだから。ただ、世界はキャンセル・カルチャーによって、少しずつ変わってきているのも事実だ。実際、公共の場で、誰かが性差別的な発言をしている現場をみたら、ワツとする人が多いと思う。それは、キャンセル・カルチャーという「公開処刑」によって、私たちの身体が調教された結果だと言えるだろう。

こうした新しい正義、「悪い人を匿名のみんなでチクチク攻撃して社会から排除する正義」は、はたして本当に正義なのかと違和感を覚える人もいる。何が「正義」か。変わりゆく時代の中で、私たちひとりひとりも絶えず自問自答し続けることが必要だ。

「20世紀の哲学者エドモンド・バークは「悪の勝利に必要な唯一のことは、善良なる人々がなにもしないことである」と記した。悪の勝利に加担しないためにも、個人やメディア、社会が正しいキャンセル・カルチャーのあり方、使い方を模索しつつ、ソーシャルグッドに繋げる必要がある。

さて今月は非常に現代的なネット社会で起こっている現象を取り上げた。実際にネット社会にはフェイクニュースが氾濫している、と言ってキャンセル・カルチャが悪いというつもりはない。何が「悪」

で何が善か。「善悪」は普遍的なものであるはずだ。「普遍」とは時代や地域に影響されない根源的なものである。我々はこの機にこれを再び考えなければならぬ。それが「哲学」である。

大峯奥駈道 (75)

体験型人間学 25

下村 嘉明

夏場と冬場では、どちらがつらいかと聞くと、皆が夏場だという。冬場だと着るものによって寒さを和らげられるが、夏場の暑さは、なんともならない。

私も、昨年、暑さに耐えきれず空調服を買った。思っていたより効果がある。猛暑で路上に立ち続ける警備員には必須だと思うが、わが社で使用しているのは、ほんの一部である。費用が2万近く手が出しにくいのが主な原因だが、熱中症になることを考えれば安いものだ。

地球温暖化の為か今年の冬は暖かい。昨年に比べると嘘のように暖かい。私のような者にはありがたくても、困る人も多いだろうと想像する。寒い朝、六甲山を見て雪景色になったことは一度もない。少し白ずんだ山の景色はあったが、連山

が雪景色という朝はない。

昨年の冬は、西宮の鳴尾浜の消波ブロックを波頭がたたきつけて六甲おろしが吹き荒れている埠頭で出入りの大型トラックの交通誘導を行っていた。今は、おなじ西宮の甲子園浜公園の歩道で仕事をしているが、寒さは全く違う。風もなく非常な寒さもない。ほんとうにありがたい。古くなった排管を掘り出して破棄し埋め戻す工事である。かなりの日数を要する工事だ。工事車両が路肩に止まるので片側交差通行の誘導、公園の利用客が工事個所の歩道に立ち入らないように誘導する二つが主な任務だ。4人がローテーションを組み行っている。

この工事で初めて若い双子とも思える警備員が来た。若い人は珍しいが、特に兄弟というのは珍しい。二人を見ていると見た目にはよく似ているが、性格はかなり違う。一人は、積極的に態度に出して頑張った姿を見せるのだが、もう一人の子は、おとなしい。話すときは普通なのだが、仕事となるとつつむきかげんになる。人それぞれの個性が生み出す表現だとなかばあきらめてみている。

新型コロナウイルス禍愚考

(その41)

明石 幸次郎

新型コロナウイルス感染愚考

(その41)

新年早々の能登半島地震で、改めて地震列島に暮らす我々は明日は我が身かなと、いつ災害の被害者になるかも知れないこと再確認をさせられました。

その状況の中でも生ある中は、日常は過ごしていかなければいけません。どう日々の壊れやすい日常生活の中で、“幸せ”を感じる、感じさせる要因があるのかを今月も探してみました。幸せの要因として、

第一要因

「やってみよう！」要因

(自己実現と成長の因子)

第二要因

「ありがとう！」要因 (つ

ながりと感謝の因子)

愛情、感謝、親切と人を喜ばせる。他人に対しても、自分に対しても親切であること。ひとの生きるのを助け、自分自身の生きるのを助ける。親切は、喜びである。

第三要因

「何とかなる！」因子 (前

向きと樂觀の因子)
樂觀性、気持ちの切り替え (引きずらない) 他者

との積極的關係、自己受容

第四要因

「あなたらしく！」因子 (独立とマイペースの因子)

他者と比較しないこと、外部の制約を感じないこと、自己概念の明確化、最大効果の追求、ひとの目を気にしないこと
この4つの要因が幸せの鍵というところ、幸せのメカニズム”という本(講談社現代新書)を書かれた前野隆司さんは言っています。

又、先日の読売新聞の家庭版の“人生案内”に50代の女性の相談者から、「この数年は体調を崩して入院を繰り返す、持病の不安はありますが、何とか、家事や仕事はしています。子供たちは家庭を持ち幸せに暮らし、孫もできました。優しい夫と不自由なく暮らしています。コロナ禍を経て、病気にもなり、昔のアルバムを見ると、子供たちと忙しく、賑やかに生活していたところが懐かしく、胸がキュンと締め付けられます。当時は子供を怒ってばかりで、自分の時間がほしいから早く成長してほしいと考えていました。かけがえのない大事な時期をもっと楽しんで育児できなかったのか後悔しています。キラキラしていたあの頃が人生のピークだったのではないか、これからは死に向かう下り坂で、老いて死を待つばかりかと絶望感でいっぱいになります。

旅行やおいしいものでも満たされない思いとどう向き合っているか分からず苦しいです」と言う悩みの相談がありました。前述した幸せを感じる“四つの要因”

のすべてを感じ得ない中年女性の悩みです。これに対して回答者の海原純子さん(心療内科医)は「体調が悪かったり、歳をとってこれまでできたことが次第にできなくなったりするのはつらいものです。数年の入院をなさって大変でしたね。気持ちが暗くなってしまうと思います。ただ、あなたが今、懐かしく、キラキラしていたと思えばその当時、ご自身が人生のピークにいたと思っていたのでしょうか。自分の時間がないとイライラしたり、怒ったりしながら過ごしたと書かれています。人は自分の真の姿やその時に持っているすばらしさに、それをなくして初めて気がつくものだと思います。あなたは体調を崩しても家事や仕事ができている、優しい夫がいて子供たちは幸せそうで、経済的にも不安はないようです。たくさんすてきなキラキラした宝物をお持ちではないでしょうか。幸せは、何か特別なことをしたり、特別なものを持つたりすることからではなく、今持っているもの、支えてくれる家族や仲間の存在に気がつき、生活を十分に楽しむ中で見つかるのだと思います。もともと歳をとった時、今のあなたがどんなに幸せだったか、と後悔しないために、

今お持ちの宝物に気がついて欲しいと思います」

と回答しています。

さすがにプロの回答だと、うなりました。まず、相談者に寄り添い、共感し、悩みを受容しながら、相談者に気づきを促して、当たり前に持っていると思っっている宝物の存在に気づかせる。そして、幸せは、今持っているもの、支えてくれる家族や仲間の存在に気がつき、生活を十分に楽しむ中で見つかるのだと思うと回答しています。

私が63歳女性が生活保護の対象にならずに死にたい、ホームレスにもなれなかったという人の電話相談の話で少しは良かったことは、海原さんの回答にある家族(娘)存在に気づいてもらったことかと思えます。この人は人生案内の相談者の女性のようなたくさんの宝物を持っている人ではないですが、娘という唯一の宝物が自分にまだ残っていると気づかれたこと、娘さんとの関係を見直しお互いに思い合って暮らすことが、この人のささやかな「幸せ」につながり、感じてもらえるようになったらと、今月も「幸せとは何か」を愚考致しました。

最後に、人生案内相談者に特に欠けているのは、幸せ要因の二番目の繋がりとして感謝の気持ちではないでしょうか？これが欠けている人は、幸せな気持ちに死ぬまでなれなく「老いて死ぬのを待つばかり」と絶望感でいっぱいになり」

日々を過ごすことになりかねませんね。

オクラの山たより (89)

困了生

一

小林一茶(1763~1827)が生きた時代は日本の文学史の上では文芸の大衆化が進んでいった時代といえます。出版業や貸し本業が盛んになるにつれて庶民が楽しむ文芸が広まってきました。一茶と同時代の人に黄表紙「江戸生艶気樺焼(えどうまれうわきのかばやき)」や洒落本「通言総離(つうげんそうまがき)」の作者山東京伝(1761~1816)がいます。また、江戸時代最大のベストセラーといつてよい滑稽本「東海道中膝栗毛」の作者十返舎一九(1765~1831)も同時代人といつてよいでしょう。こうした戯作者の活躍だけではなく川柳の流行も見逃せません。川柳は一六七五(明和二年)に「俳風柳多留」が出版されて以降、大きなブームとなり、「俳風柳多留」は一八四〇(天保十一)年まで一六七編が刊行されるほどの盛況ぶりをみせました。教科書にも載っている有名な川柳には次のような作品があり

ます。

- ・孝行をしたい時分には親はなし
- ・役人の子はにぎにぎをよく覚え
- ・侍が来ては買っていく高楊枝

しかし、このあたりだけではまだまだ江戸の川柳の面白さを味わうには不十分です。教科書には載りにくい筆者が愛誦する江戸の古川柳を何句か紹介します。本誌で山椒魚さんが示されている川柳の秀作とは違い以下で紹介する中には少しばかり下品で猥褻な作品、つまり当時の言葉で破礼句(はれく)も交じりますが、江戸のお笑いとお許しください。なお、「へ」の「たれながら……」の作品だけが「俳風末摘花」から採った作品で他は「俳風柳多留」から採りました。

イ 母の名は親仁(おやじ)の腕に

しなびて居(ゐ)

ロ 女湯に起きた起きたと

抱いてくる

ハ 武蔵坊とかく支度に手間が取れ

ニ 仙人さまあと濡れ手で介抱し

ホ やはやはと重みのかかる芥川

へ たれながらそこへ寄りなと

顎で言ひ(「俳風末摘花より」)

ト 芳町へ行くには和尚たちのまま

イ 母の名は親仁(おやじ)の腕に

しなびて居(ゐ)

「イ」の句は年老いた父親のすっきりしなびた腕に「〇〇命」と母親の名前が入れ墨されている。それを見て笑っている息子という情景です。二人揃っていい年をした親爺とお袋も昔は惚れあつたのか、それも熱烈に、と思うと息子はおかしくして仕方がないのです。「親爺、それを彫ったときにはどんな気分だったのかい、お袋一筋、ホの字だったのかい」と聞く息子。「馬鹿野郎。親爺をからかうもんじゃねえ。張り倒すぞ」と怒る父親。下を向いてククツと笑っている母親。そんな風景が見えてくるような句です。親爺を詠んだ川柳には「親爺はまだ西より北へ行くなり」という句もあります。西は浄土ですが、北は吉原です。元氣ですが仕方のない親爺殿です。

ロ 女湯に起きた起きたと

抱いてくる

「ロ」の句は解説など入らないでしょう。赤ん坊がやつと寝ついてホッとした女房はやつと風呂屋に行く。と、お腹をすかせたか泣き叫ぶ赤ん坊。男親はこうなるとお手上げです。困りはてて風呂屋の女湯へ「起きた、起きたよ、何とかしておくれよ。おかあ！」と駆け込んできます。情けない顔をして跳びこんできた男の顔と慌てふためく女湯の客たち、その騒ぎより大きな赤ん坊の泣き声。傑作

コントの一コマです。

ハ 武蔵坊とかく支度に手間が取れ

「ハ」は有名な作品です。常に七つ道具、つまり鉄熊手・大鑑（おおやり）・大鋸（おおのこ）・鉞（まさかり）・突き棒・指叉（さすまた）・袖搦（そでがらみ）を身につけて武蔵坊弁慶は出陣したという伝説があります。これだけの道具を背中にしよって行くとなるとかなりの時間がかかったはずだと笑いとばした句です。弁慶といえは歴史上有名な人物。こうした歴史上の人物を扱った句を歴史句といいますが、そのあたりの事情について古川柳をこよなく愛好する田辺聖子さんは次のように言っています。

史上有名な人物、尊敬される人物、お手本、忠臣の鑑（かがみ）、貞女烈婦賢母、豪傑勇士を、ナミの人間のレベルに引き下ろし、張りボテの権威を、さながら噴霧器でシュツと蠅を殺すがごとく蹴散らかし、平俗に卑近に扱い、シャレのめす、そういう作業が古川柳の体質の一つだと思っている。汝は本来人間なり。何を偉そうに偉ぶらなあかんねんという、したたかな精神の居座りが見える。

「何を偉そうに」というあたりの田辺さんの指摘は痛快でおもしろいです。

ニ 仙人さまあと濡れ手で介抱し

「三」の「仙人」はもちろん洗濯をしている女性の白い脛（すね）に見とれて神通力を失い地上に落下したという久米の仙人のことです。「あの人、また落ちてきたよ。いったい何回目だろうね。まったく懲りないんだから」とブツブツ言いながら洗濯で濡れた手でかいがいしく介抱する女性たちの姿が目には浮かびます。

ホ やはやとは重みのかかる芥川

伝説や古典の話の中から採った句も川柳には多いのです。「ホ」の句はそうだった川柳の句です。出典は「伊勢物語」第六段の「芥川」です。「男」つまり在原業平が深窓の姫君藤原高子（後の二位后清和天皇の女御で陽成天皇の生母）を盗み出して芥川（今の高槻市のあたり。「芥川だより」の「芥川」です）まで背負って逃げてきます。うるわしい姫君の重みが肩に掛かっ

てきて、しかも姫の息づかいは耳もとをくすぐります。しかも手はしっかりと姫の腰を抱きかかえています。なまめかしくも柔らかな重みは姫の重みと同時に二人のこれからの難儀な未来を示す重さでもあります。その重みがやわやわと増していく。上品な色気と暗い終末へとむかう運命とがかさなる秀句です。蛇足ですが「伊勢物語」第六段の終わりで姫君は「鬼」に一口で食べられ姿を消し男は悲嘆にくれることとなります。悲劇のフィ

ナーレです。

「伊勢物語」だけではなく「源氏物語」から採った川柳もあります。

・競馬を見ずに喧嘩に人だかり

これは「源氏物語」の「葵」の巻を川柳化した作品です。源氏の君の正妻である葵の上と恋人の六条御息所が祭りの競馬見物でばったり鉢合わせをして牛車の争いになったという場面です。川柳を読んだ大笑いしていた江戸の市民は寺子屋や戯作本などで学び我々の想像するよりもずっと古典の知識があつたかもしれませ

へ たれながらそこへ寄りなと

顎で言ひ

「へ」の句は破礼句（ばれく＝下品で猥褻な川柳のこと。古川柳には多い）の代表のような句です。一読して理解することが難しい句です。「たれながら」が特に難しい。田辺聖子さんの解説を読むまで筆者も合点がゆきませんでした。「たれ」

自分が商売をしている家の前で尻をまく

って遊女がシャーシャーと気持ちよく用を足しています。そして、そこを通りか

かった客に「寄つてきなよ」と声をかけて顎で家を指しているのです。家といっ

ても「近世風俗志」（1899年刊、岩波文庫）によれば、切り見世の家は間口四尺五寸

（136cm）、入り口には二尺（51cm）の

戸があり、客のあるときはその戸を閉めたそう

です。奥行きは九尺（272cm）。商売のために蒲団を敷けば、おそらく部屋

いっぱいになったでしょう。切り見世にはこうした家がずらりと多く建っていました。もちろん当時の長屋と同じく切

り見世にも並んだ建物の奥には共同便所がありました。そうした共同のトイレを切り見世の遊女は使っていないのです。

商売に忙しくてそんなところまで行っているヒマはないというわけです。小用を

足しながら傍らを通り過ぎていこうとする客に「寄つてきなよ」と声をかける。

尾籠という以前に切り見世で商売をする遊女たちのたくましさに圧倒されます。

この切り見世に足繁く通う客は丁稚、下男、仲間（ちゅうげん）、人足といった下層

の庶民の男たちでした。たぶん貧困を嘆いていた一茶も通ったことでしょう。代

金は百文（現代の二千元ほど）。二十四文の代金で商売をした夜鷹よりは値段が

高かったといえます。その最下層の遊女といえる夜鷹につい

ての川柳を紹介すると

・振り袖の天命を知る吉田町

「振り袖」は若い女性の着る着物。「天命を知る」とは「論語」にある言葉で五十歳のこと。「吉田町」は本所にある吉田町で夜鷹の巣窟でした。五十歳にもなるというのに若い娘の姿をして客を取ろうとする夜鷹です。ちよつと考えさせられる川柳です。少しばかり「論語」をかじっていないと理解できない作品ですが、やはり当時の庶民のもつ古典知識は侮れません。ほかにも

・気晴らしに二十四文は大きすぎ

というのがあります。この川柳の作者は客の立場からしか夜鷹を見ておらず、笑えないどころか不快にさえなる作品です。

この句に対してすでに紹介したように一茶にも夜鷹を詠んだ次の句があります。

・木枯らしや二十四文の遊女小屋

・玉あられ夜鷹は月に帰るめり

・夕顔にほのぼの見ゆる夜鷹かな

木枯らしが吹きすさぶなか粗末な小屋で、わずかに二十四文で身を売る女性。その多くは四十代から五十代でした。しかも多くは性病などの病気持ちでした。玉のような霰(あられ)が降りかかってくる寒さにふるえる夜鷹は月にでも帰ったか

と案じる一茶。一茶は路上で客を引く夜鷹を、親しみを込めて美しく詠い上げています。

ト 芳町へ行くには和尚たちのまま

遊女の話ばかりでしたが、江戸では陰間と呼ばれた男色を商売とする男性たちもいました。江戸の堀江六軒町、別名「芳町」は男娼の巣窟でした。そこに通った客は僧侶が多かったようでそれを詠んだのが「ト」の句です。吉原へ行くには僧侶は頭を隠すために頭巾をかぶって医者に変装していましたが、男色の芳町ではその必要はない、というわけです。

三

ところで以上いろいろと紹介した川柳を読書家で勉強家でもある小林一茶はたぶんほとんど読んでいたはずで、この文芸の大衆化といってもよい時代の空気をぞんぶんに一茶は吸っていました。この空気は芭蕉の時代はまだほとんど存在せず、蕪村の時代には少しずつあらわれ一茶の時代、つまり文化・文政の時代にはドツと出て来たといつてよいでしょう。こうした事情は夏目成美と一茶の關係を述べたときにすでに述べましたが、それをもう一度述べてみようと思えます。

一茶の俳句はわかりやすく子供向けの俳句であるとはよくいわれます。確かに次

の句などは誰にでも一読して理解できる句です。

・我と来て遊べや親のない雀

・雪とけて村一杯の子供かな

・瘦蛙負けるな一茶これにあり

・明月をとつてくれると泣く子かな

・やれ打つな蠅が手をすり足をする

どの句も平明な話し言葉で書かれており、川柳と同じく誰でも分かる句です。

また、遺産の相続にどこまでも執着したことで強欲といわれ、「七番日記」に記された妻との交接の記録から性豪ともいわれました。こうした一茶の行いは彼の立場から見れば相応の理由があったことはすでに述べたとおりです。見ようによつては正直な気持ちの表現といえます。

その一方で彼の詠んだ句から「ひねくれ者」というレッテルも貼られています。たとえば次の句からです。

・人そしる会が立つなり冬籠もり

・ふるさとやよるもさはるも茨の花

・雪の日やふるさと人もぶあしらひ

・心から信濃の雪に降られけり

しかし、こうした愚痴のような句も見方を変えれば個人の心理があらのままに生き生きと表現されているともいえます。

一茶の俳句の見られる日常的に使われる話し言葉の多用と個人の正直な心理描写。これらの特徴は芭蕉にも蕪村にもあまり見られないものです。これらの特徴をとらえて一茶を近代最初の俳人とする見方があります。芭蕉や蕪村の俳句には「源氏物語」や西行の歌をはじめとして平安時代や中世の古典文学がちりばめられているので彼らの俳句は古典に通じた人にか十分に理解できません。また心理の描写もストレートというわけでもなく「『言外の言』(言語で言い表されたものの向こうにあるものを暗示する)」によつて言い表すといった古典文学の型を踏まえたものでした。一茶の作品はこれらのことからまったく自由なものでした。これが一茶が近代最初の俳人であることの根拠というわけです。

近代という言葉が出てきましたが、学校の歴史の時間に習う明治から始まる近代は近代化とはすなわち西欧化でした。しかし、文明開化・富国強兵を推進した我が国の明治時代を考えれば近代化とは西欧化といえますが、世界全体で通用する基準とはいえません。広く世界の動きを見れば、まず政治では専制君主制から近代的な民主制への移行という歴史的過程こそが政治における大衆化といえます。同じような大衆化が社会のさまざまな分野で進んでいきました。

では、日本の近代はいつ始まったと考えるか。社会のさまざまな分野での大衆

化ということから考えると文化・文政のころということになります。貨幣経済が社会のすみずみまで行き渡り、お金を多少とも手に入れた人たちはそれまで自分らにとつて手の届かなかつた文化的なことに手を染めようとした。その一つが俳句であつたのです。一茶の生きた時代に俳句人口は爆発的に増えています。この数の変化が俳句の質の変化をもたらしたというわけです。古典をまったく知らない人でも俳句が作れる時代となつたのです。その新しい時代に最もよくこたえたのが一茶なのでした。

- ・ 日の暮れや人の顔より秋の風
- ・ 天に雲雀人間海にあそぶ日ぞ
- ・ 梅が香やどなたがきても欠け茶碗
- ・ 有明や浅間の霧が膳をはふ
- ・ 涼風の曲がりくねつて来たりけり
- ・ 這へ笑へ二つになるぞけさからは
- ・ 花の影寝まじ未来が恐ろしき

これらの句を見ると芭蕉や蕪村とだいぶ違うことに気づきます。第一に古典文学の素養がなくとも誰でも分かる内容であり日常の言葉で書かれていることです。第二には作者の気持ちがあストレートに書かれていることです。これらは近代文学、特に詩歌の基本といえるものです。以上が「一茶近代最初の俳人」説の概要です。

さて、ここまで書いてきて何だといわれそうですが、近代の特徴を大衆化だけでスッパリと切り出してはたしていいものか、どうか。筆者にはまだまだ検討の余地があるように思いますが、読者の皆さんはいかがでしょうか。

また、優れた日本文学の研究者ドナルド・キーンさんは彼の著書「日本文学史」で「一茶の句は確かに心に残るけれど、結局は『重い主題』を採り上げなかつたことから、物足りなさも残る」と批評しています。キーンさんのいう「重い主題」とは何か。「言外の言」のことを指しているのかどうか、筆者にはよく分かりません。一茶を近代最初の俳人として高く評価するのか、いや、それほどでもないと考えなのか、一茶の俳句集を繰り返して読み返して考える課題はまだ多いです。

隠された歴史(64)

満田 正賢

懐風藻(かいふうそう)は現存する日本最古の漢詩集です。収録された漢詩は稚拙なものが多いとされますが、そこに記された人物の伝記には、日本書紀にな

い史実が記されており、たくさんの注目すべき点があります。そこで、今回と次回に分けて、この懐風藻に記された各人物の伝記を通じて、懐風藻の編者が残そうとしたもう一つの史実を探っていきたいと思います。

まず、懐風藻について少し説明します。懐風藻は奈良時代、天平勝宝三年の年次が記された序文をもっており、聖武天皇の娘である孝謙天皇の時代に成立したと考えられます。懐風藻の編者は不明ですが、淡海三船(おうみのみふね)説が有力です。なぜならば、懐風藻の序文に「淡海先帝の命を受けて」とあり、最初に大友皇子の詩から始まっているからです。ちなみに淡海三船の系譜は、「天智天皇(淡海帝)―大友皇子(弘文天皇)―葛野(かどの)王―池辺王―御船王(臣籍降下により淡海三船となる)」です。『新日本紀』には、淡海三船が神武天皇から持統天皇まで、日本書紀に記された天皇に弘文天皇を加えた全天皇の漢風諡号を一括撰進したと記されています。しかし、懐風藻が伝える各人物の伝記を読むと、はたして懐風藻の編者は各天皇の漢風諡号を撰進した淡海三船としてよいか、名前を秘匿した他の人物ではなかったか、または淡海三船は二面性を秘めた人物だったのか、などの疑問が湧いてきます。

懐風藻には、六十四人、百十六首(序文には百二十首と記されている)の漢詩

が載っており、くわえて九人の伝記が載っています。漢詩が三首以上収録されている人物を挙げると、大津皇子四首、文武天皇三首、藤原史(不比等…ふひと)五首、山田三方三首、長屋王三首、紀男人三首、百済和麻呂三首、藤原総前(房前…ふささき)三首、藤原宇合六首、藤原万里五首、丹墀(多治比…たじひ)広成三首、釈道融五首、石上乙麻呂四首、です。

取り上げた漢詩の数だけみると、一見時の権力者、特に藤原氏中心の編集がなされているように見えますが、一方、伝記が記載されている人物は、大友皇子(天智天皇の第一皇子)、河島皇子(天智天皇の第二皇子)、大津皇子(懐風藻には天智天皇の第一皇子と記されている)、釈智蔵、葛野王(大友皇子の第一子)、釈弁正、釈道慈、釈道融、石上乙麻呂、の九人であり、特に大友皇子伝から葛野王伝までは、大友皇子直系の家伝の話であると推測できます。

次に、懐風藻に記された各人物の伝記の現代語訳の抜粋と注目を紹介します。現代語訳には、講談社・学術文庫の江口孝夫現代語訳を用いましたが、江口訳には日本書紀の記述に合わせようとする傾向が見られるため、重要な部分には(*)として原文の表記を付け加えました。

1. 大友皇子

・天智天皇（*淡海帝）の第一皇子（*長子）である。

・唐からの使者、劉徳高は一目見て並外れた偉い人物と見ていった。「この皇子の風来・骨柄（*風骨）をみると、世間並みの人ではない。日本の国などに生きる人ではない（*實非此國之分）」皇子はある夜夢をみた。天の中心ががらりと抜けて穴があき、朱い衣を着た老人が太陽を捧げもつて、皇子に奉った。するとだれかが脇の下の方に現われて、すぐに太陽を横取りして行ってしまった。驚いて目を覚まし、怪しさのあまりに内大臣の藤原鎌足公（*藤原内大臣）に事こまかに、この旨をお話になった。内大臣は嘆きながら、「恐らく天智天皇崩御ののちに（*聖朝萬歳之後、悪賢い者が皇位の隙を狙うでしょう。しかしわたしは普段申し上げておりました。』どうしてこんな事が起こりえましょう」と。（中略）わたしに娘がおります。どうか後宮に召し入れて妻にし、身の廻りのお世話を命じてください」と申し上げた。そこで藤原氏と親戚関係を結び、親愛の仲になっていった。

・皇子がようやく二十歳になられたとき太政大臣の要職を拝命し、もろもろの政治を取りはかられた。皇子は博學で、各種の方面に通じ、文芸武芸の才能にめぐまれていた。（中略）年二十三の年に皇太子になられた。

・壬申の乱にあい、天から与えられた運命を全うすることができないで、二十五歳の年齢でこの世を去られた。

（注目点）

① 大友皇子と壬申の乱の評価について
大友皇子が太陽を横取りされた夢の話は、天智天皇の死後、大海人皇子（天武天皇）が反乱を起こし、近江朝（大友皇子）を倒した壬申の乱を示していると思えません。天武系統の最後の天皇である孝謙期にこのような話を書物に記すことが出来たというのは驚きです。天武天皇崩御の後、天智天皇の皇女である持統・元明各天皇の時期に、壬申の乱の評価が変わってきた可能性もあるのではないかと考えられます。

② 藤原鎌足と大友皇子の結びつきについて
時の権力者の藤原氏の祖である藤原鎌足が大友皇子を支えていたという表現は、懐風藻の編者と考えられる大友皇子の子孫が、藤原氏にすりよる為のエピソードとも考えられますが、藤原氏が天武天皇によって厭われ、持統期以降復活してきたという史実を裏付けているのではないかと考えられます。

2. 河島皇子

・河島皇子は天智天皇の第二皇子である。気持ちのおだやかな人で、太つばらであり、典雅な方であった。（*志懐温祐。局量弘雅）

・はじめ大津皇子と意気投合して交際を結んでいた。大津皇子が反逆を計画したとき、河島皇子はそれを密告した。

・しかし、また友に忠告することもしないで、友人の大津皇子を水火の苦しみに追い込んだことに対しては、わたしとしても疑いが残る。（*余亦疑之）

3. 大津皇子

・大津皇子は天武天皇（*浄御原帝）の第一皇子（長子）である。丈高くすぐれた容貌で、度量も秀でて広大である。（*状貌魁梧。器宇峻遠）

・高貴な身分でありながら、よくへりくだり、人士を厚く待遇した。（不拘法度。降節禮士）

・当時、新羅の僧で行心という者がいた。天文や占いをよくした。僧は皇子に上げてこういった。「皇子の骨柄（*骨法）は人臣にとどまっていますよという相ではございませぬ。長く下位にとどまっておりますなら、恐らく身を全うすることはできないでしょう」と。この僧のまどわしに皇子は迷われ、とうとう謀反の行為に出られたのである。

（注目点）

① 大津皇子の謀反の真相

大津皇子の伝記は大津皇子が素晴らしい人物であったにも拘わらず、唐の僧侶に惑わされて謀反を起こしたと記しています。河島皇子の密告についても、疑いの目で見えています。これは朱鳥元年（686）天武天皇崩御直後

に大津皇子の謀反をでつちあげ、天武十年（681）に皇太子となった、我が子草壁皇子のライバルを蹴落とし、持統天皇の謀略に対する非難のニユアンスが含まれているように感じます。

② 大津皇子が天武天皇の第一皇子（*長子）であるとは

日本書紀は、天武天皇の皇子は、高市皇子、草壁皇子、大津皇子の順であると記しています。壬申の乱の総大将となった高市皇子が天武天皇の長子であることは自明のことと思われませんが、懐風藻はなぜ大津皇子を長子と記したのでしょうか。それは持統天皇の姉である太田皇女が生んだ大津皇子の方が、持統天皇が生んだ草壁皇子より年上であったという史実を伝えんが為ではなかったでしょうか。ここでも懐風藻の編者は持統天皇の策略と日本書紀による史実の改ざんを非難しているように見えます。

4. 釈智蔵

・智蔵師は出家する前の姓は禾田（あわた）氏。天智天皇（*淡海帝）の御代に中国（*唐国）に留学した。

・持統天皇（*太后天皇）の御代に智蔵師は日本に帰ってきた。

・人びとは智蔵師の言に従い、その学識の深さに驚かない者はいなかった。持統天皇（*帝）は智蔵をおほめにな

り、僧正の位を与えられた。

(注目点)

① 「太后天皇」について

「太后天皇」については、「隠された歴史(62・63)でふれました。江口氏の訳では、太后天皇を持統天皇と解釈し、「智蔵伝」に特別な関心をもっていません。しかし、喜田貞吉氏は、智蔵が天武二年に僧正に任ぜられたと『僧綱補任』に記されていることを発見し、天智期と天武期の間に天智天皇の皇后である倭姫王(やまとひめ)「わのひめおう」とも読める)が天皇となっていた時期があると推測しました。

② 「太后天皇」が天皇であった期間について

智蔵伝の中の、智蔵が僧正の位を与えられた部分の読み下し文は以下です。

「太后天皇の世、師本朝に向かふ。同伴陸に登り、経書を曝涼す。法師襟を開き風に對(む)かひて曰はく、『我も亦經典の奥義を曝涼す』といふ。衆皆嘲笑り(あざけり)妖言と以為(おも)へり。試業に臨み、座に昇りて敷演す。辭義峻遠、音詩雅麗。論蜂のごとくに起れりと雖も、應對流るるが如し。皆屈服し驚駭(きょうがい)せずとい

ふこと莫し。帝嘉(よ)みしたまひ、僧正に拝したまふ。」

この文面を見ると、智蔵が僧正の位を与えられた時期は、「太后天皇の世」になります。『僧綱補任』で、智蔵が僧正の位を与えられた時期が天武二年ならば、日本書紀が記す天武二年には実際には倭姫王が天皇であったことになります。なお、「太后天皇」とは倭姫王ではなく大友皇子(弘文天皇)のことであるという見方もありますが、天武二年にはすでに大友皇子は亡くなっていますので、倭姫王が日本書紀の記す天武期以降も天皇であったという見方の方が可能性は高いと思います。

ここまで、懐風藻に記された各人物の伝記と注目点を取り上げてきました。次回は葛野(かどの)王伝について考察する予定です。

俳句

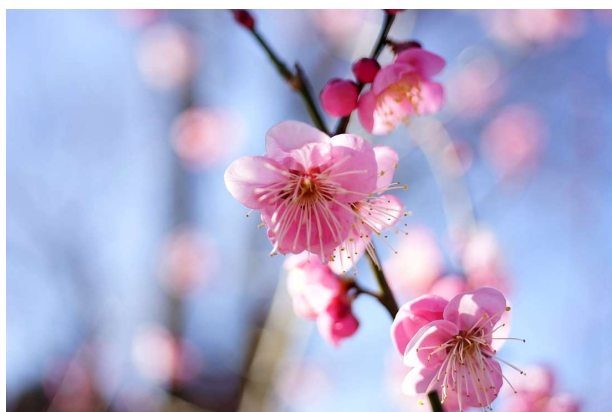
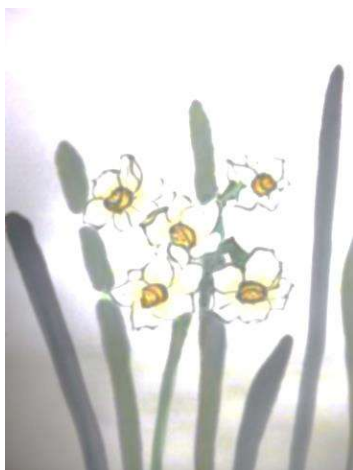
影山 武司

冬天の青の眩しき大観音
縁日に鸚鵡や孔雀冬ぬくし
棟上の槌音高き冬の朝
水洩の止まらぬ夜の句作かな
形よく吹き溜まりたる落葉かな
裸木の一枝ごとに日を止め
埒もなき話の弾む掘炬燵
指切れし紙の白々寒九かな
冬風や汀に遊ぶ日の欠片
春隣十色の達磨並びをり

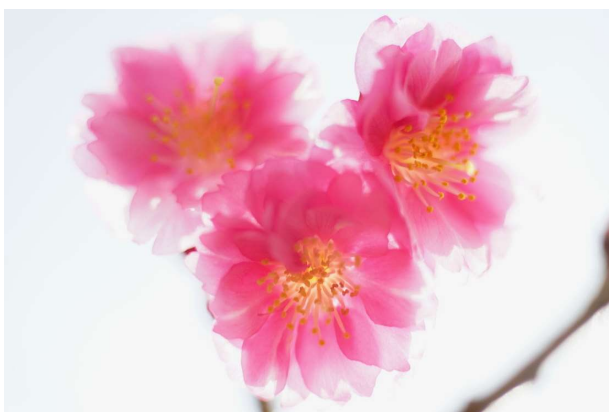
編集後記

SK生

▲今月も「芥川だより」が投稿する皆さんの協力で発行することができた。編集者としては感謝、感謝である。▲中世の人々がよく語った「無常」ではないが明日のことは誰にも分からないのは今も昔も同じだ。京大におられた鎌田弘毅先生によると南海トラフ巨大地震は二〇三五年プラスマイナス五年で起こる可能性があるという。被害総額の予想は二二〇兆円。日本の国家予算のざっと2倍以上である。考えるだけで恐ろしい。▲人間は未来にむかってどのように進むのだろうか。ひよっとしたら尻の方から恐る恐る進んでいくのではないか。最近、そんなことをよく考える。



梅の花「道知辺」



サクラの新品種

川柳は、毎日の暮らしの中でふと感じた自分の思いを五七五に託してうたう文芸。何でも川柳になります。心を十七音字のかたちにするので、自分を見つめ直すことも、また他の人とお互いに関わり合うこともできます。気軽に、紙と鉛筆を持って川柳に挑戦してみると、新しい世界が広がります。今月も、川柳心の散歩道へ。

守備範囲守ればきつと花も咲く 羊子
口実は祝勝会の飲み仲間 和俊
セバの雄接戦かわしファン沸かす 孝子
あれほしさあれになったとあれが言う

道頓堀阪神アレで大騒ぎ 昭三郎
ひろむ

まことにアレで盛り上がったプロ野球界。阪神タイガースが昨年、十八年ぶりのリーグ優勝から三十八年ぶりの二度目の日本一を手にした。ファンは日頃の屈折した思いを晴らし、それをうたう時事川柳もあふれた。

そんな中で注目されたのが、岡田彰布監督がずっと口にしていた「普通」と言う言葉。チームにおける自分の役割を自覚し、持てる力を皆が普通に発揮すれば勝てるよ、と言うのである。勝負師の言葉は厳しい。能力以上は求めない、期待

される局面で能力を発揮してほしいだけ、と。

しかし、役割を自覚し力を出すとき、人はその「能力以上の力」を発揮することがある。遠く2002 FIFA WORLD CUP KOREA/JAPANにおいて、ブラジルとの決勝戦の前にドイツのゴール・キーパーだったオリバー・カーンが語った言葉が今も忘れられない。彼は、「ブラジルは最高のチームだ。100%の力を出しても勝てないだろう。自分の力を超えようと思うんだ」と言った。彼は負けたが、自分を超えようとした。超えようとしたとき見えてくるものがある、と教えてくれた。

監督はそのことを分かっているのだろう、「選手たちが今年、成長したとは思わんよ。しかし来年は成長するんとかやうかな」と言った。阪神ファンもそうでない人も、来季の阪神、注目すべし。なお、1句目は、野球と何の関係もない句かもしれない。しかし、何であれ「守備範囲を守る」ととき、人は時にそれを越えて、自らをさえも超えようとするのであり、その時「花が咲く」ことを含意しているだろうと、私には感じられた。

手のひらで温めた文字の五七五 カナ

内藤凡柳川柳集『人間』のなかに、

両の手に宇宙も愛もみな這入り

という句があります。思いをしつかり温め、句にしましょう。

人生の旅は追い風向い風 幸一郎

追い風と言いい向い風と言うが、人生には追い風よりも向い風が吹くときの方が多いのではないか。しかし、「向い風回れ右して追い風に」とは、なかなかいかないもの。そんな時は、「未来から吹く風だから立ち向かう」。気持ちの切り替えも必要。

満月の明り隈なく世を照らす 邦弘

スーパームーンの夜など、まことにそのように実感します。そして、夜が明け生きものたちが目覚め活動を始めると、世界をあまねく照らし命を育むものが太陽であることにあらためて気づきます。満月の明りもまた、お日さまあつてこそものだからです。

また、もう一つ、命を支えるものは水です。水は地にあふれ、地の隅々まで行き渡り万物を潤し、命を支えます。あり

ふれた太陽と水に感謝。それを教えてくれた満月にも。

ありがとう我に親切くれた人 あつ子

何気なくいただいた親切が身にしみことは、誰の経験にもあること。凡柳先生もそれを忘れない方でした。

まがるまで教えてくれた人が付ちこんな句を残しています。日常のちよつとした人情の機微をうたうのも川柳です。

子等巢立ち二人に広い寒の家 土竜

昔、私の家は四畳半と六畳二間、そこに男五人兄弟と両親が住んでいた。やがて家は建て増しされたが、子どもらが進学やら就職やらで次々と家を離れて行ったとき、親の寂しさはいかばかりだったか。今になって思うことしきり。